玉川の草

泉鏡花

――これは、そゞろな秋のおもひでである。青葉の雨を聞きながら――

露を其のまゝの女郎花（おみなえし）、浅葱（あさぎ）の優しい嫁菜の花、藤袴、また我亦紅（われもこう）、はよく伸び、よく茂り、慌てた蛙は、蒲（がま）の穂（ほ）と間違へさうに、（我こそ）と咲いて居る。――添へて刈萱（かるかや）の濡れたのは、蓑にも織らず、折からの雨の姿である。中に、千鳥と名のあるのは、蕭々（しょうしょう）たる夜半（よわ）の風に、野山の水に、虫の声と相触れて、チリチリ鳴りさうに思はれる……その千鳥刈萱。――通称はツリガネニンジンであるが、色も同じ桔梗を薄く絞つ

て、俯向（うつむ）けにつら〳〵と連（つらな）り咲く紫の風鈴草、或は曙（あけぼの）の釣鐘草と呼びたいやうな草の花など——皆、玉川の白露（しらつゆ）を鏤（ちりば）めたのを、——其の砧（きぬた）の里に実家のある、——町内の私のすぐ近所の白井氏に、殆ど毎年のやうに、土産にして頂戴する。

其年も初秋の初夜過ぎて、白井氏が玉川べりの実家へ出向いた帰りだと云つて、——夕立が地雨に成つて、しと〳〵と降る中を、まだ寝ぬ門を訪れて、框（かまち）にしつとりと置いて、帰んなすつた。

慣れても、真新しい風情の中に、其の釣鐘草の交つたのが、わけて珍らしかつたのである。

鏑木清方(かぶらぎきよかた)さんが――まだ浜町に居る頃である。塵も置かない綺麗事の庭の小さな池の縁(ふち)に、手で一寸劃(ちよつとしき)られるばかりな土に、紅蓼(べにたで)、露草、蚊帳釣草、犬ぢやらしなんど、雑草なみに扱はるゝのが、野山路(みち)、田舎の状(さま)を髣髴(ほうふつ)として、秋晴の薄日に乱れた中に、――其の釣鐘草が一茎、丈伸びて高く、すつと咲いて、たとへば月夜の村芝居に、青い幟(のぼり)を見るやうな、色も灯(とも)れて咲いて居た。

遣水(やりみず)の音がする。……

萩も芙蓉も、此の住居には領かれるが、縁日の鉢植

を移したり、植木屋の手に掛けたものとは思はれない。
「あれは何(ど)うしたのです。」
と聞くと、お照さん――鏑木夫人――が、
「春ね、皆で玉川へ遊びに行きました時、――まだ何にも生えて居ない土を、一かけ持つて来たんですよ。」
即ち名所の土の傀儡師(かいらいし)が、箱から気を咲かせた草の面影なのであつた。
さら〳〵と風に露が散る。
また遣水の音がした。
金をかけて、茶座敷を営むより、此の思ひつき至つて妙、雅(が)にして而して優である。

……其の後、つくし、餅草摘みに、私たち玉川へ行つた時、真似して、土を、麴一枚ばかりと、折詰を包んだ風呂敷を一度ふるつては見たものの、土手にも畦にも河原にも、すく／＼と皆気味の悪い小さな穴がある。――釣鐘草の咲く時分に、振袖の蛇体（じゃたい）なら好（い）いとして、黄頷蛇（あおだいしょう）が、によろによろ、などは肝を冷（ひや）すと何だか手をつけかねた覚えがある。

「何を振廻はして居るんだな、早く水を入れて遣らないかい。」

でん／＼太鼓を貰へたやうに、馬鹿が、嬉しがつて

居る家内のあとへ、私は縁側へついて出た。

「これですもの、どつさりあつて……枝も葉もほごしてからでないと、何ですかね、蝶々が入つて寝て居さうで……いきなり桶へ突込んでは気の毒ですから。」

へん、柄にない。

フヽンと苦笑（にがわらい）をする処（ところ）だが、此処（ここ）は一つ、敢て山のかみのために弁じたい。

秋は、これよりも深かつた。――露の凝（こ）つた秋草を、霜早き枝のもみぢに添へて、家内が麹町の大通りの花政と云ふのから買つて帰つた事がある。

……其時、おや、小さな木兎(みみずく)、雑司ヶ谷から飛んで来たやうな、木葉木兎(このはずく)、青葉木兎(あおばずく)とか称ふるのを提げて来た。

手広い花屋は、近まはり近在を求(あさ)るだけでは間に合はない。其処で、房州、相模はもとより、甲州、信州、越後あたりまで――持主から山を何町歩と買ひしめて、片つ端から鎌を入れる。朝夕の風、日南(ひなた)の香(か)、雨、露、霜も、一斉(いっとき)に貨物車に積込むのださうである。――其年活けた最初の錦木は、奥州の忍の里、竜胆(りんどう)は熊野平碓氷の山岨(やまそば)で刈りつゝ下枝を透かした時、昼の半輪の月を裏山の峰にして、ぽかんと留まつたのが、……其

の木兎で。
若い衆が串戯（じょうだん）に生捉（いけど）つた。
こんな事はいくらもある。
「洒落（しやれ）に持つてつて御覧なせえ。」と、花政の爺さんが景（けい）ぶつに寄越したのだと言ふのである。
げに人柄こそは思はるれ。……お嬢さん、奥方たち、婦人の風采（ふうさい）によつては、鶯、かなりや、……せめて頬白、獦子鳥（あとり）ともあるべき処（ところ）を、よこすものが、木兎か。
……あゝ人柄が思はれる。
が、秋日の縁側に、ふはりと懸り、背戸（せど）の草に浮上つて、傍に、其のもみぢに交る樫の枝に、団栗（どんぐり）の実の

転げたのを見た時は、恰(あたか)も買つて来た草中から、ぽつと飛出したやうな思ひがした。

いき餌(え)だと言ふ。……牛肉を少々買つて、生々と差しつけては見たけれど、恁(こ)う、嘴(はし)を伏せ、翼(はね)をすぼめ、あとじさりに、目を据ゑつゝ、あはれに悄気(しょげ)て、ホ、と寂しく、ホと弱く、ポポーと真昼の夢に魘(うな)されたやうに鳴く。

その真黄な大きな目からは、玉のやうな涙がぽろ〳〵と溢(こぼ)れさうに見える。山懐(やまふところ)に抱かれた稚(おさな)い媛(ひめ)が、悪道士、邪仙人の魔法で呪はれでもしたやうで、血の牛肉どころか、吉野、竜田の、彩色の菓子、墨絵

の落雁（らくがん）でも喙（ついば）みさうに、しをらしく、いた〳〵しい。
……その菓子の袋を添へて、駄賃を少々。特に、もとの山へ戻すやうに、と云つて、花屋の店へ返したが。
――まつたく、木の葉草の花の精が顕はれたやうであつた。

　こゝに於て、蝶の宿（やどり）を、秋の草にきづかつたのを嘲（あざけ）らない。

「あゝ、ちら〳〵。」

　手にほごす葉を散つて、小さな白いものが飛んだ。障子をふつと潜（くぐ）りつゝ、きのふ今日蚊帳を除つた、薄搔巻（うすかいまき）の、袖に、裾に、ちら〳〵と舞ひまうたのは、

それは綿よりも軽い蘆の穂であつた。

（大正十三年十月）

底本：「花の名随筆10　十月の花」作品社
　　1999（平成11）年9月10日初版第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十七巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：林　幸雄
2002年1月28日公開
2005年11月23日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。